

外国語が苦手なあなたの職場に、外国人のビジネスパーソンが同僚としてやってきた。あるいは急な海外出張が決まった。こんなとき、外国人相手に仕事の成果を上げるにはどうしたらいいのか。欧米の大学で教壇に立つなど海外で十一年間過ごし、「ビジネスでガイジンに勝てる人、負ける人」(飯塚書店)などを著した作家の生井利幸氏(44)に、外国人と上手に仕事をするノウハウをまとめてもらった。

# 外国人は「わくわく」しない

□上

## 職場や出張での接し方

一回目は自分の職場に同僚として、外国人を迎えた場合について取り上げたいと思う。

今や日々の業務において職場にいる外国人の同僚と意思疎通を図り、チームワークを構築してビジネスを遂行していくことは、組織の一員として必要不可欠になってきている。自分が外国語が苦手でも、相手も日本語を十分に解さない場合でも例外はない。職場で外国のビジネスパーソンとより良いチームワークを築く上で、留意すべき四つのポイントを述べたい。

### 本音は「誘って」

第一に外国人に対して積極的に食事やお茶に誘うよう心掛けよう。日本人が外国人に抱く「アフターファイブは極力、プライベートな時間を大切に」というイメージはまったくの固定観念にすぎないと認識しよう。他の職場の同僚と同じく、彼らも本当は日本人の同僚ともしっかり打ち解けたいというのが本音だ。



### 寄稿 作家・生井利幸

なまい・としゆき 91年明大大学院法修了。米ペンシルベニア州ラフィエット大学講師、オランダ王国国立フローニンゲン大学法学部客員研究員等を歴任後、帰国。生井利幸事務所を設立し、代表に。著書に「日本人が知らない米国人ビジネス思考法」(マイクロマガジン社)、「話し方の達人」(経済界)など。

# 同僚の「きずな」を確認

「同僚から気軽に『飲みに行こうよ』と言われるようにになりたい」とこぼしている。こいつは、外国人としての本音は、決してAさんだけが持つ特別なものではない。外国人だからと特別扱いせず、プライベートでも積極的に交流を図ろう。英語など外国語が苦手なあなた。ご心配なく。メモ用紙を活用すれば、大丈夫だ。パソコンソフトの販売会社に勤務するBさんは、業務上の伝達事項に関して、外国人に口頭で伝えることが難しい用件が発生したとき、頻繁に「メモ用紙」を使うという。

### 視線の交わり

Bさんは、外国人のデスクに行く前に、伝えたい用件を簡単な英語で箇条書きにまとめ、それを笑顔で渡す。メモを活用すれば、英語の苦手な日本人も、日本人との会話に苦勞している外国人も、お互い悩まずに済むというものだ。ただし、メモを渡す際

には、書いた内容を簡単に説明することを心掛けるよう。機械的に渡すだけでは、渡された相手の気分も良くない。用件そのものは既にメモ用紙に書いてあるわけだから、口頭では単語を並べるだけでも会話は成り立つ。Bさんは、英会話が苦手でも、メモの工夫一つで、効率よく外国人とやり取りできると実感している。

# アフター5に誘う

## 外国人と一緒に働くコツ

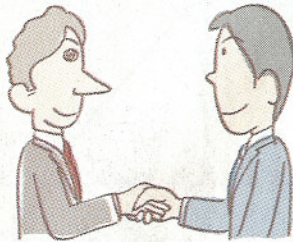
①積極的に食事やお茶に誘うよう心掛けよう



②外国語が苦手な向きは、メモ用紙を活用



③アイ・コンタクトで上手にコミュニケーション



④「素早く対応し、行動する」をモットーに



外資系航空会社に勤務するCさんの職場には外国人社員が多い。



# 会話苦手ならメモ／約束 迅速に実行



Cさんにとって職場で英語をしゃべることは日常茶飯事だが、外国人社員とのやり取りにおいては、単にしゃべるだけでなく、適度なアイ・コンタクトを心掛けていこう。ほどよい頻度で外国人とアイ・コンタクトを行うことで、彼らとの関係において「家族で感じられるような温かさ」を醸し出せるという。

アイ・コンタクトは三秒程度が適切とされる。それ以上長いと、意味ありげな「凝視」とみなされ、思わぬ誤解を招く恐れがあるので注意しよう。簡単なスキルだが、「職場の外国人と視線を交わす」工夫をすると、従来とは状況が一変するはずだ。そうすることで、外国人とのチームワークづくりにも一段と磨きがかかると言える。

オフィスでただ黙々と机やパソコンに向かうという仕事ぶりは、日本独自の閉鎖的な習慣だ。外国人の目には、このような働き方を「やる気のない労働者」にしか映らないことを覚えておこう。外国人の目にもあなたがそう映らないためにも、しゃべらないときも適度に外国人にも目を配り、より確かな意思疎通を図ることを目指したい。

最後に、外国人と仕事をする場合、「鉄は熱いうちに打て」は外せない鉄則だ。外国人は物事ははっきりと述べるが、単に述べるだけでなく「素早く行動する」ことをモットーとする人が多い。海外のビジネス社会で

は、何より迅速に行動することが評価の対象となるからだ。不動産取引を行う会社に勤務するDさんは、職場で外国人社員と接するとき、この「鉄は熱いうちに打て」を忘れない。日本人同士でコミュニケーションを図る場合、何となく不透明に話が進むことが多い。なぜなら、お互いが日本人であれば、暗黙の了解でことを進めることができるからだ。だが、相手が外国人となると話は別だ。

Dさんは、外国人社員とのやり取りをする際には、できるだけ明確に話をし、約束した事項については「迅速に実行に移す」ことを心掛けているという。社内メールのやり取りも同じこと。外国人からメールを受けたときには、素早く返信。そうすることで相手との距離感もなくなり、時にはプライベートルームな相談まで受けるという。

職場では、外国人とのやり取りの迅速さを一つの仕事術と考え、外国人との信頼関係を築き、仕事全体の流れをよりスムーズなものにしたい。

外国人とのチームワークを強化するヒントは、現在の職場の中にあるのだ。言うまでもなく、英語ができることは決して邪魔になるものではない。だが、より良いチームワークを構成するポイントは、言葉よりもむしろ、外国人に対する振る舞い方に注意を払うということなのだ。

今回は28日付に掲載します。

次回